

「散歩好きはドイツ人と森林空間」

岐阜県立森林文化アカデミー 学長 ● 涌井 史郎



●ドイツの造園学と林学
森林文化アカデミー学長職に就いて以来、これまで数多いドイツ訪問の中心が変わった。以前の訪問目的は、ランドシャフト、つまりドイツ独特の生態系を尊重した地域計画や都市計画に関する学術交流がほとんどであった。

しかしアカデミー学長に就任して早々に手掛けた、ロッテンブルグ林業大学との協定が締約されて以来、自ずと林業に関する訪問目的が変わってきた。とはいえ、当然と言えば当然ではあるが、論者の視点からは特段乖離した訪問目的になっっているという実感はない。

そもそも専門の造園学の我が国の系譜は、「景觀」という言葉を案出した東京帝國大学教授の三好学博士が植生地理学を専門としており、論者の恩師のそのまた恩師である本田静六博士もまた、ドイツ森林美学の権威フォン・ザリツシュ博士の影響を受け、造園学に勤しんだ学徒であったという経歴からも分かるように、近代造園学と林学は実に近縁な学問であるといえる。

そもそもドイツにおける近代造園学は

林学の延長線上にあるといつてよい。我が国のように、日本庭園という偉大な文化が庶民に至るまで浸透している国柄と違い、ドイツでは庭園学領域が市民の日常性には縁遠い。庭園は、王侯貴族の間であり、一般的には公園緑地こそが市民の関心事である。国土に対する可住地面積の割合は、イギリスは88%・ドイツが69%であるのに対し、我が国は33%程度という数字から見ても、都市とのかかわりで見ると緑地とは、ドイツの場合、ほぼ平地林そのものとなる。

●用材林から空間利用へ

平地林としての緑地では、歴史的に日本という刈敷農法、あるいは林内放牧地、そしてキノコなどの林産物の収穫、そして何とんでも寒冷地であるドイツであればこそ燃料の供給地としての機能が重要であり、暮らしに密接にかかわる存在であった。そうした意味では、わが国の里山に似た機能を担っていたと言える。

こうした平地林は、都市林(Stadtwald)とも呼ばれた。そもそもが用材林であり

生活のための林地であったものが、19世紀初頭から都市を彩るレクリエーション空間としての機能が強く意識され、暮らしを支える林地から、産業革命が生み出した都市の大気汚染や公衆衛生の悪さからのアジールの機能、そしてレクリエーション空間へと主客が逆転を遂げた。その規模も大きく、フランクフルトでは4200ha、ベルリンのブルーネバルトは3200haもの規模である。

●森での散歩が好きはドイツ人

ドイツ人の特性の一つに散歩好きがよくあげられる。一般的にそうした散歩は、シュパツィーアガング(Spaziergang)という。このニュアンスは日本語の散歩という言葉では意味の全てをカバーしきれない。ドイツ版のSpaziergangを借りれば『人々は例えば、森や、公園や、川沿いや、繁華街などをSpaziergang(散歩者)として散歩したり、あるいはジョーウィンドウを眺めたりすることもある。Spaziergangを通じて我々は、リラック

クスしたり、物思いにふけったりすることができるのである』とある。こうした

散歩好きは、当然のように都市周縁の都市林に足を向ける。日曜ともなれば、こぞって森に足を向ける。この森林空間、つまり都市林と位置付けられる林地での散歩を「ヴァンデルング」という。その歩き方も2時間あるいは10km20kmが当たり前という逍遙である。また、ヴァンデルングの受け皿となる森林もまたそれに相応しい体制を整えている。森林そのものが、私有林に至るまで「保健休養目的による森林への立ち入りが許されること」という法律により開放され、よく整備された逍遙路が林内にはりめぐらされている。また駐車場などの付帯施設もよく整備されており、人々の日常の利用を支えている。

ドイツの人々は、あの産業革命をもたらした厳しい都市生活の原体験から学んだ心と体の健康を、ヴァンデルングにより森林の恵沢から得ようと努力している。

●日本には里山がある

ドイツのように平坦な都市林こそわが国には豊富に存在しないが、傾斜のある里山は豊かである。ストレスの多い現代社会にあって、こうした里山の整備を進め、人々が心と体の健康を維持できるように森林管理者と行政の不断の努力が求められるところである。何よりも市民に顔を向けた整備と運用が重要である。

いずれにもせよ、市民の心と健康を維持するために里山へのアクセスが増えれば、生物多様性の維持や、防災条件の向上などの公益的便益が増大するばかりでなく、市民自身と里山の健康に寄与し、地域の活力の増進にも大きく貢献することとなる。